

東京芸術劇場 海外オーケストラシリーズ

アルトゥーロ・トスカニーニ・ フィルハーモニー管弦楽団

インタビュー ミヒャエル・バルケ

指揮者ミヒャエル・バルケに聞く、
日本ツアーへの期待。

「日本の聴衆は私にとって 唯一無二の存在。再会が楽しみです」



ミヒャエル・バルケ
©Kartal Karagedik

イタリアの文化都市バルマ。一般にはバルメザンチーズの産地程度の知名度にとどまるが、音楽界では20世紀の大指揮者アルトゥーロ・トスカニーニの出身地として知られる。テアトロ・レジジョと呼ばれるバルマの王立劇場はイタリア有数のオペラハウス。アルトゥーロ・トスカニーニ・フィルハーモニー管弦楽団は、トスカニーニ財団直営のオーケストラでテアトロ・レジジョやヴェルディ・フェスティバルでのオペラ演奏、交響楽の定期演奏会の両面で幅広く活動し、明るく伸びやかな響きに独特の個性がある。日本には最初がジョルジョ・ベルナスコーニ、2度目がロリン・マゼールの指揮で訪れているが、13年ぶりの来日となる2020年は、全国共同制作オペラなどで日本でもお馴染みのドイツ人指揮者ミヒャエル・バルケとの初共演に期待が高まる。

イタリアにはよく客演されるのですか？

「はい。ヴェローナやミラノ、パレルモ、サルディーニヤなどで定期的に客演指揮をしています。私のイタリア・デビューは2011年、ブレスリアのテアトロ・グランデでした」

マグデブルク歌劇場の音楽総監督時代、ドニゼッティやヴェルディを多く指揮されていますが、マエストロのイタリアオペラへの愛情はどこから来るのですか？

「私にとってイタリアオペラは、歌劇指揮の核、あるいは種子として存在しています。フランス、ドイツ、とりわけワーグナーなどの作曲家たちは、イタリアの大作曲家の影響下にあります。ベルカントのメロディーラインをはじめとする美意識や手法は、すべての作曲家にとっての手本でしょう。それゆえに私も過去6年間イタリアに居を構えていて、オペラへの愛は強まる一方です」

目下のところのツアープログラムは“半々”、つまり前半が歌手との歌曲、後半がブラームスの交響曲第1番です。どのような理由から、こうされたのですか？

「私たちはひとりのドイツ人指揮者と、オペラとシンフォニーを車の両輪と

して地元根を下ろすイタリアのオーケストラの組み合わせで日本へ向かいます。そこで主催の東京芸術劇場とも相談の上、東京のお客様に“普通ではない”プログラムをお届けすることになりました。とはいえ音楽の歴史をひもどけば、一つの演奏会のプログラムにオペラ・アリアと交響曲を並べるのが、“普通ではない”などということは全くありません」

歌手の皆さんのご紹介をお願いします。

「2人とも、私としばしば共演する歌手です。アレックス・ペンダとは『トスカ』『ドン・カルロ』を手がけ、近々、レコーディングを含む『サロメ』のツアーにも出かけます。カメン・チャネフとは『トロヴァトーレ』『トスカ』『ドン・カルロ』を一緒にしました。2人とも舞台における完璧な歌役者であり、際立った存在感、テキストへの深い理解、ずば抜けて高い音楽能力の持ち主です」

日本へは2015年からほぼ定期的いらしてありますが、あなたにとって日本とは、どのような国ですか？

「私は日本を愛しています。国土、人々、文化、そして食事！初来日以来、私は一貫してポジティブな印象しか持ち得ていません。私は友人たちに常々『もし“おもてなしの心”というものを習いたいなら、日本へ出かけなければならぬ』と言いつけています」

日本のホールとその聴衆をどう評価されますか？

「今までに日本で演奏したホールはどこも本当に素晴らしい！とりわけ東京、大阪、金沢のホールはファンタスティックです。温かな響きと分析的な透明度との傑出したバランスを伴う、驚くべき音響です。中でも東京芸術劇場コンサートホールは、私のお気に入りといえます。ホールで指揮をしているときの温かな響きが、私の好みなのです。そして日本の聴衆は唯一無二の存在——私はいつも大きな関心と尊敬を寄せています」

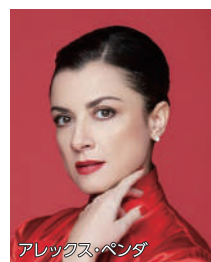
取材・文：池田卓夫（音楽ジャーナリスト@いけたく本舗®）

4月30日(木) 19:00開演 コンサートホール

指揮：ミヒャエル・バルケ ソプラノ：アレックス・ペンダ テノール：カメン・チャネフ
管弦楽：アルトゥーロ・トスカニーニ・フィルハーモニー管弦楽団
曲目：ヴェルディ／歌劇『運命の力』序曲

ヴェルディ／歌劇『マクベス』から「勝利の日に～来たれ、急いで」（マクベス夫人のアリア）
ヴェルディ／歌劇『イル・トロヴァトーレ』から「見よ、恐ろしい炎を」（マンリコのカヴァレッタ）
プッチーニ／歌劇『トスカ』から「歌に生き、恋に生き」（トスカのアリア）、「星は光りぬ」（カヴァラドッシのアリア）
ヴェルディ／歌劇『仮面舞踏会』から「私は君の傍らに……」（愛の二重唱）
ブラームス／交響曲第1番 八短調

詳細はHPへ



アレックス・ペンダ



カメン・チャネフ

東京芸術劇場シアターオペラvol.13 全国共同制作オペラ
ヴェルディ/歌劇『ラ・トラヴィアータ』(椿姫)
 全幕(日本語字幕付原語上演)

イタリアの世界的ソプラノ エヴァ・メイが歌う

「不思議だね、これが夢に見た恋なのかしら」ヴィオレッタは1幕の最後のアリアを歌い出す。恋の予感に胸ときめかせながらも、娼婦という自分を見据え、「パリという砂漠の中で、見捨てられた哀れな女」である現実を直視する。「椿姫」のヒロイン、ヴィオレッタは、虚飾の中に潜む暗い陰を、華やかなアリアに込めなければいけない。それゆえヴィオレッタの複雑な心情を巧みに歌い上げるソプラノは、そう多くはない。キャリアを積み上げ、表現を磨き、鍛錬した声でのみ歌うことの出来る難役なのだ。そのヴィオレッタを歌える数少ないソプラノが、イタリア生まれのプリマ・ドンナ、エヴァ・メイだ。モーツァルトの諸役でスタートし、ロッシーニやドニゼッティなどベルカントのレパートリーで、コロラトゥーラ歌手としてキャリアを築いた。いまは声の成熟ともない、レパートリーを広げ、ヴェルディの『リゴレット』ジルダや『ファルスタッフ』のアーチェなど正統派リリコのレパートリーで大活躍を続けている。エヴァ・メイの声はクリアで澄んでいて、高音がよく伸びる。さらに表現が繊細で、表情も豊かだ。ヴィ

オレッタは1幕ではコロラトゥーラの妙技を披露しなければいけないし、2幕ではアルフレードを愛する切々とした叙情的な表現が求められる。3幕では死に瀕したドラマチックな表現も必要だ。エヴァ・メイはこの3つの要素を全て身に付けており、ヴィオレッタ役で絶賛されてきた。いまソプラノとして円熟期に入ったエヴァ・メイの、毅然とした大人のヴィオレッタが聴けるに違いない。

文:石戸谷結子(オペラ評論)



エヴァ・メイ

2月22日(土) 14:00開演
 コンサートホール
 指揮:ヘンリク・シェーファー
 演出・振付:矢内原美邦
 管弦楽:読売日本交響楽団
 合唱:新国立劇場合唱団
 ヴィオレッタ:エヴァ・メイ ほか

詳細はP12へ



白河、金沢公演あり

ベートーヴェン生誕250周年記念

ミーツ・ベートーヴェン・シリーズ

『ミーツ・ベートーヴェン・シリーズ』への期待

2020年12月に生誕250年を迎える楽聖ベートーヴェンのピアノ音楽に焦点を充てた「ミーツ・ベートーヴェン・シリーズ」がフォルテピアノとモダンピアノを弾き分ける仲道郁代のリサイタルでスタートする。ピアノ音楽の歴史を見ると、ハイドン、モーツァルト時代とショパン、シューマン、リスト時代では隔世の感があるように思う。しかし、この両時代に立ち位置をもち、いわゆる古典派様式とロマン派様式の不可避不可欠な橋渡しをしているのがベートーヴェンなのである。鍵盤楽器としてはチェンバロが主流であった時代のハイドンやモーツァルトが作曲した音楽と、初期から新しい時代の楽器フォルテピアノの強弱法を駆使し、旋律の流麗さよりもむしろ重厚で豊かな響きの和声とリズム変化を重視したベートーヴェンの音楽との間に早くも古典主義からロマン主義への移行が見られるのだ。

音の組み合わせや構成、そして明晰な主題の展開と形式的バランスに美の本質を見出していた18世紀音楽に対し、ベートーヴェンの作品では一音



仲道郁代

清塚信也

山中千尋

山下洋輔

清水和音

一音、音そのものに意味が与えられ、綿密な論理によって、ある種メッセージが表現されるのである。それは音によるドラマと言っても過言ではない。しかし、そのメッセージが如何なるものなのか、どのような意味を持つかの解釈が一筋縄ではゆかないのだ。逆に言えば、解釈の可能性は無限に開かれている。だからベートーヴェンは面白いのだ。作品に一家言をもつ若手のピアニスト清塚信也、そしてふたりのジャズ・ピアニスト、女流の山中千尋と巨匠の山下洋輔、最後に登場するのがベートーヴェン音楽と対峙し続けてきた清水和音だ。どのベートーヴェンも聴き逃さない。

文:平野昭(音楽評論)

Vol.1 1月10日(金) 仲道郁代 詳細はP9へ
 Vol.2 5月22日(金) 清塚信也 Vol.4 10月16日(金) 山下洋輔
 Vol.3 7月10日(金) 山中千尋 Vol.5 12月15日(火) 清水和音
 詳細はHPへ

芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミー 第6回演奏会

若手プレイヤーたちのフレッシュな吹奏楽サウンド

東京芸術劇場が2014年から行なっている育成事業、芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミーの第6回定期演奏会が2020年2月29日(土)に開催される。芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミーに所属する前途有望な若手プレイヤー17人が、国内屈指のプロ吹奏楽団である東京佼成ウインドオーケストラとともにフレッシュな吹奏楽サウンドを会場に響かせる。

指揮はこれまで井上道義、秋山和慶、鈴木優人といった日本を代表するマエストロたちが担当してきた。今回は東京佼成ウインドオーケストラの正指揮者で、吹奏楽シーンを力強く牽引する大井剛史がタクトを振る。

曲は「吹奏楽の神様」とも呼ばれるアルフレッド・リードの「パッサカリア」をはじめ、久石譲「Single Track Music 1」、クルト・ヴァイル「小さな三文音楽」、デイヴィッド・マスランカ「交響曲第4番」を取り上げる。

選曲の意図やコンサートの聴きどころを大井剛史が語ってくれた。

「吹奏楽の世界で生きていく上では避けて通れないリードの作品、生誕120



©Hikaru

年を記念して東京芸術劇場から提案があったヴァイル作品、若手奏者とともに作り上げるにふさわしいマスランカの大作、そして久石譲の作品をチョイスしました。お客様にとっては、なかなか生演奏で聴くことのできない作品に触れる絶好のチャンスです。久石譲作品は、ジブリの音楽のイメージを持たれている方には新鮮に響くでしょう。ぜひご来場ください」

新進気鋭の若手プレイヤーが東京佼成ウインドオーケストラ&マエストロ大井剛史とコラボレーションして生み出す熱演、お聴き逃しなく！

文：オザワ部長(吹奏楽作家)

2月29日(土) 15:00開演

詳細はP12へ

コンサートホール

指揮：大井剛史

吹奏楽：芸劇ウインド・オーケストラ・アカデミー

東京佼成ウインドオーケストラ



大井剛史

©K.Miura

東京芸術劇場&ミュゼ川崎シンフォニーホール共同企画

第9回

音楽大学フェスティバル・オーケストラ

ミッキーが、若い心に火をつける

音楽大学の学生たちの演奏は「音楽する喜びが感じられる」と好評だ。技術水準も非常に高く、情熱的な演奏は感動を呼ぶ。各大学の校風が演奏に表れ、その違いが味わえて楽しい「音楽大学オーケストラ・フェスティバル」は、首都圏にある9つの音楽大学のオーケストラが、それぞれの演奏を聴かせてくれる企画。その特別編として、各大学の選抜メンバーで構成されるのが、この「音楽大学フェスティバル・オーケストラ」だ。2016年から地方の音楽大学も加わっているが、今回は「関西の音楽大学オーケストラ・フェスティバル」から、京都市立芸術大学の学生たちが参加する。

このオーケストラを指揮するのは、愛称「ミッキー」こと井上道義。ストレートな物言いと明解な音楽作りで、学生たちから熱気を引き出してくれるはず。

今回のプログラムは「踊り」がテーマのようだ。ヨーゼフ・シュトラウスのワルツ「天体の音楽」は、祝祭で初演されて大成功を収めた、彼の代表作。優雅なワルツの次は雰囲気が一変。中の一節が緊急地震速報の告知音に使われ



井上道義

©青柳 聡

ていることでも知られる伊福部昭「シンフォニア・タブカーラ」だ。この「タブカーラ」は「立って踊る」という意味のアイヌ語。そしてストラヴィンスキー『春の祭典』はバレエのために作られた作品。「タブカーラ」、「春の祭典」ともに人類が持っていた原始的なエネルギーを感じさせる作品で、演奏も難しい。それだけに、学生たちの意欲も聴けるに違いない。

文：堀江昭朗(音楽ライター)

3月28日(土) 15:00開演 ミュゼ川崎シンフォニーホール

3月29日(日) 15:00開演 コンサートホール

詳細はP14へ

指揮：井上道義 管弦楽：音楽大学フェスティバル・オーケストラ

[参加音楽大学] 上野学園大学、国立音楽大学、昭和音楽大学、洗足学園音楽大学、東京音楽大学、東京藝術大学、東邦音楽大学、桐朋学園大学、武蔵野音楽大学、京都市立芸術大学